【福祉文化批評　2022 年 11 月】

「福祉文化批評」は酒の肴であってはならない!!

山口道宏

福祉文化と貧困が無縁ではないように、福祉文化を語るとき、生活とは表裏の関係だ。むしろ「くらし」が分母で「文化」は分子といっていいか。

「福祉文化批評」(HP)は、冒頭でこう謳っている。

「社会福祉の分野では、日々いろいろなことが起こっています。制度の改革、新鮮な実践活動、感動的な出来事もあれば忌まわしい事件もあります。それらを「文化の眼鏡」をかけて見つめ直すのが福祉文化批評です。略」

「福祉文化批評をどう書くか」(薗田碩哉)　を読んだ。

筆者の主張は、ここでの原稿は「感想文」か「ルポルタージュ」か「評論」かの違いを指摘する。さらに「深読み」では、とり上げる事象の実態と背景を調べ上げ、分析し、そのうえで批評を展開すべきと念を押した。すなわち自身が体験した所感に留まっては「批評」に値しないという。「いじめにあっている子に寄り添いました」「子ども食堂に参加してきました」「〇〇団体に寄付してきました」は、筆者の視座に立てば、それでは自らの体験記を披露したにすぎないというのが本音か。

誰もが知るように、昨年のオリンピック・パラリンピックでは、始まる前から開催に際してのカネにまつわるキナ臭い話題が持ち上がった。またコロナ禍にも拘わらず多額の税金を投入し強行する主催国ニッポンには国内からも冷ややかな反応があった。そして開催から 1 年後のいま、開催国ニッポンでの「贈収賄」が続々と明るみになっている。

これら一連に無頓着では「日本選手はよくやった」「あれには感激したよ」の居酒屋談義だと非難されよう。「文化の眼鏡」では、戦後の障害者福祉の歩みを検証し、障害者スポーツを語るが必須。すなわち「福祉文化批評」とは酒の肴であってはならない、と。

薗田稿の「---どう書くか」は、どうみるかに関わっていること。自省をこめて糧としたい。